

一 絵がうまい友だち

朝、ろうかを通ると、また葵^{あおい}の絵の前に人が集まっていた。先月のコンクールで金賞をとった絵だ。夕焼けの空が水でにじんで、オレンジとむらさきがとけ合い、本物よりもきれに見える。

「葵ちゃん、すごいね。プロみたい」

だれかの声が聞こえて、わたしは早足でその前を通りすぎた。ふり返らないようにしたのに、あの空の色は、教室に着いてもまぶたに残っていた。わたしだって、小さいころから絵をかくのは好きだった。でも、あんな空は一度もかけたことがない。

写生会の絵は、来週までにしあげなければならない。わたしは、葵と同じように空をにじませてみようと思った。

放課後の図工室で、わたしは窓の外のけやきをかいていた。筆にたっぷり水をふくませて、空に色を落とす。でも、色はまだらに広がって、紙はしわしわにふくらんだ。もう一度やっても、同じだった。わたしは筆をバケツにつつこんで、ぐるぐるとかき回した。水がにごって、灰色になった。

窓の外の空も、いつのまにか厚い雲におおわれていた。けやきの葉が、風にあおられてざわざわと鳴っている。

「千夏^{ちなつ}、まだ残ってたの」

ドアが開いて、葵が入ってきた。わたしは画用紙を手でかくそうとしたが、まにあわなかった。

「……葵のまねしたんだけど、全然だめ」

葵はだまって絵をのぞきこみ、下のほうを指さした。けやきの根もとで、ボールを追いかける一年生を、わたしは小さくかいていた。空がうまくいかないあいだに、何となくかき足したものだ。

「ここ、すごいいい。この子、本当に走ってるみたい」

「そんなの、ついにかいたただけだよ」

「わたし、人をかくとかたまっちゃうんだ。みんな気をつけしてるみたいになるの。千夏のかく人は、いつも動いてるよね。前から、いいなあって見てたんだ」

わたしは、自分の絵をもう一度見た。空はまだらなのに、一年生たちは、今にも笑い声が聞こえてきそうだった。ボールを追う子のぼうしが、走りたいきおいでずれている。

あの葵に「いいなあ」と言われるなんて、考えたこともなかった。顔がかつと熱くなって、わたしは下を向いた。はずかしいのに、口のはしが勝手に上がってしまう。

「……もう一まい、かき直す。今度は、人をいっぱいかく」

わたしは新しい画用紙を取り出して、えんぴつをにぎった。空は、うすく一回ぬるだけにしよう。葵はとなりのいすを引いて、わたしの手もとをのぞきこんだ。

一 絵がうまい友だち 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

二 兄の成績

「直人^{なおと}、また学年で一番だつて。すごいじゃない」

夕ごはんのテーブルで、母が兄の成績表を広げた。父もはしを置いて、「中二でこれなら、たいしたものだ」とのぞきこんだ。兄は「たまたまだよ」と言いながら、からあげに手をのぼした。

六年生の翔太^{しょうた}は、みそしるのおわんに顔を近づけた。ランドセルの中には、六十二点の算数のテストが、四つにたたんで入っている。兄は小学生のころ、九十点より下をとったことがなかったと、前に母が話していた。

「翔太は、テストどうだったの」

「……まだ返ってきてない」

翔太はごはんを口いっぱいにはおぼつて、それ以上聞かれないようにした。

その夜、翔太は机^{つくえ}に向かっていた。兄と同じように、色ペンを三本使ってノートをまとめてみる。赤は大事なところ、青は公式、緑は先生の話。けれど、線を引くほどページはごちゃごちゃになった。兄のノートは、どのページもきれいに整理されていたのに。何回読み返しても、中身は少しも頭に入っていない。

窓の外では、雨が細く降り続いていた。ガラスをつたうしずくが、いつまでも止まらなかった。翔太は色ペンを放り出して、机につつぶした。

「翔太、まだ起きてるか」

兄が、目覚まし時計を持って入ってきた。

「これ、急に動かなくなつたんだ。直せるか」

翔太は体を起こし、引き出しを開けた。ドライバーやピンセットが、大きさの順にならんでいる。小さなドライバーを取り出して、裏^{うら}のねじを外すと、電池のばねが曲がっているのが見えた。ピンセットでそつと起こして、ふたを閉める。秒針が、こちこちと動き出した。

「やつぱりすごいな。おれ、こういうの全然だめなんだよ。この前のラジオも、翔太が直してくれたよな。おまえの手、魔法^{まほう}みたいだ」

兄は時計を耳に当てたまま、しばらく動かなかつた。翔太は手の中のドライバーを見つめた。兄にほめられたのは、いつ以来だろう。顔が熱くなつて、どこを見ていいかわからない。照れくさいのに、胸を張りたくもなる。

「……ほかに、こわれてるものがあつたら持つてきてよ」

「じゃあ、今度は自転車のブレーキを見てくれよ。キーキーうるさいんだ」

兄が出ていくと、翔太は色ペンを一本だけ残して、あとは筆箱にしまった。それから、たたんだテストをランドセルから出して広げた。まちがえた問題を、自分のやり方で、一つずつ解き直しはじめた。

二 兄の成績 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。